

## ルツ記 1

ルツ記は「さばきつかさがおさめていたころ」という言葉で始まります。さばきつかさ、つまり士師の時代、それはイスラエルの歴史の中でも暗黒の時代でした。士師記の最後にはこのように書かれています。「そのころイスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。」士師期の後半は自分勝手な方法で礼拝するようになったイスラエル民族がどんなに墮落し、目を覆うような悲惨な状態になっていたか描かれています。ルツ記はそんな時代のある家族の物語です。

エリメレクとナオミ夫婦にはマフロンとキルヨンの二人の息子がいました。彼らはユダのベツレヘム出身のエフロテ人と記されています。エフロテとはベツレヘムの古代の呼び名であり、このような表現がなされていることから、この家族が由緒ある家柄であったことが考えられます。この家族に三つの大きな悲劇が立て続けに襲います。最初の悲劇は食べ物がなくなることでした。

ベツレヘムというのは「パンの家」という意味だそうですが、皮肉なことにその地に飢饉が起こったのです。皆さんは食べるものがない、という経験をされたことはあるでしょうか。私は正直ありません。戦時期を過ごされた方はもしかしたらそのような経験されたことがあるかも知れません。食べ物がなく、というのは人間にとってどんなに辛いことでしょうか。飢え死にの危機に陥ったエリメレクの家族は、生まれ故郷を後にしてモアブの地に移住することを余儀なくされます。おそらくベツレヘムの名士であり、裕福な家族であった彼らにとって、それがどんなに苦渋の決断であったか想像にかたくありません。

モアブの地に行った時のナオミの気持ちを推し量ってみましょう。住み慣れた家を離れ、使い慣れた台所用具、生活用品も持って来れたのはごくわずか。お友達もいない地、しかも当時モアブとイスラエルは友好関係とはほど遠い緊張関係の中にありました。彼らは言わば異国モアブに身を寄せた難民となったのですが、モアブ人は偶像を拝む異教の民でした。バアルという偶像礼拝も行われていましたが、モアブ人はまたケモシュという偶像を拝んでいました。ケモシュは人間の生贄を求める神でした。そんな習慣を目の当たりにしたら、エリメレクの家族はどんなに大きなショックを受けたことでしょうか。このような異教の地で、どのようにイスラエル人としてのアイデンティティーを保ち、イスラエルの神

ヤハウエへの信仰を保ったらいいなのでしょう。ナオミの人生、生活は大きく変わったに違いありません。

しかし、悲劇は続きます。そのモアブの地に移住し、そこでの生活にやっと慣れてきた頃、夫エリメレクが死に、ナオミは二人の息子と後に残されたのでした。当時は今と違って女性の自立、ということはありませんでした。社会の中で女性の地位は極めて弱く、一家の大黒柱となる男性によって女性の立場は保証されたのでした。夫エリメレクを失ったことは、ナオミにとってどんなに辛く、大変なことであったことでしょうか。しかし、ナオミには二人の息子がいます。母親は子供を守り育てる、という大きな使命、生きがいによってふるい立たせられるものです。当時は女性の働き口は家庭以外にはありませんから、おそらく二人の息子が働きに出て、なんとか家族で食べていけたのだと思います。ナオミの望み、生きがい、そして生活の頼りは息子たちでした。

その二人の息子はモアブ人のお嫁さんをお願いします。これはナオミにとっては受け入れるのが大変難しいことであったことと思います。モアブ人はアブラハムの甥、ロトの子孫で、もともとは近しい民族でしたが、その後はイスラエルとの関係は悪くなっていきました。かつてイスラエルがエジプトからモーセに導かれて出ていき約束の地を目指す旅路にあった時、バラムという予言者を雇ってイスラエルを呪わせようとしたり、モアブの娘たちがイスラエルの民を偶像礼拝に引き入れ、神様の怒りを引き起こし、2万4千人もの民が神罰で死んだ事件がありました。そのために、モーセの律法にはモアブ人は10代目の子孫さえ、決して主の集会に加わることはできない（申命記23:3）とされています。イスラエル人にとってモアブの娘、というと道德の低い娘、というイメージが強く、イスラエルのお母さんたちは自分の息子に決してモアブ人のお嫁さんをお願いとは思わなかったのです。息子たちがモアブのお嫁さんを連れてきた時、ナオミはどんな気持ちになったのでしょうか？私の恩師、宣教師のマイリス先生は、ルツ記のメッセージの中、「母親の使命は夢を葬ること」と言っています。（ところで、私のメッセージのかなりはマイリス先生のメッセージから教えられたことです）「お母さんたちは子供について夢があるでしょう。こんな仕事をしてほしい、こんな人と結婚をしてほしい。絶対そうはならないんですよ。夢を葬ること、それが母親の使命。」皆さん、どう思いますか。今ナオミの家の台所には主婦が3人います。うまくいくのでしょうか？教会の台所でも、お料理の仕方、味付け方、それぞれやり方があって、難しいこともあるのではないのでしょうか。お料理の味付けもイ

スラエル風にするか、モアブ風にするか、きっとお互い大変ではなかったかと思うのです。いつの時代も、どの国でも嫁姑の関係は複雑です。ほとんどの場合、なかなかうまくいきません。ましてや国際結婚、しかもお母さんは未亡人です。息子にべったりし、嫁にやきもちを焼いたりしてもおかしくない状況であったのに、なんとこの嫁姑の関係は素晴らしい関係となったのです。誰が賢かったのですか？勿論ナオミです。ナオミはこの二人のモアブの嫁をそのまま受け入れ、大切にしました。

そして第3の悲劇がナオミを襲います。なんと二人の息子、マフロンとキルヨンが立て続けに死んでしまったのです。疫病か何か事故であったのか、どうして死んだのか聖書は語りません。ただナオミは二人の息子と夫に先立たれて、後に残された、と記されています。これはもう立ち直れないような打撃、衝撃であったに違いありません。私たちの人生で経験する苦しみの中、愛する家族を失う以上の苦しみはないでしょう。ナオミはなんと、その肉親すべてを失ってしまったのです。

ナオミはモアブに来なかったら、こんなことにはならなかったのに、と悔やみ、自分たちの決断を呪ったのではないのでしょうか。後悔に心が支配されそうになる誘惑があったのではないのでしょうか。あの時ああしていなければ、と私たちも悔やんでも悔やみきれない、という経験をする時があるのではないのでしょうか。あるいはなぜ神様はこんなひどいことを許されたのか、なぜ一人だけでも残しておいてくれなかったのかと神様を恨み、「神を呪って死になさい」と言ったヨブの奥さんのように、信仰を捨て去る誘惑もあったのではないのでしょうか。聖書はその時ナオミがどのような内なる苦しみ、葛藤を通ったのか詳しく語りません。ただこう書かれています。「ナオミは嫁たちと連れ立って、モアブの野からベツレヘムに帰ることにした。主がご自分の民を顧みて、彼らにパンを下さった、とモアブの地で聞いたからである。」またしてもパン、食料という生活の必要によってその生きる道が余儀なくされる歩みです。けれどもナオミは、夫と息子の二人に先立たれる、という悲劇の最中で、神様がご自分の民を顧みてパンをくださった、という知らせに心動かされます。心ばかりでなく、モアブの地を後にして、ベツレヘムに帰る、という大きな決断をします。これはナオミについて何を語っているのでしょうか。まず、ナオミが自暴自棄になっていないことが分かります。そしてイスラエルの神への信仰も失ってはいません。ナオミはこの重すぎる試練の中、その計り知れない喪失感の中、主の恵みのほうへ向かっていく決断をしたのです。

しかしその途上、ナオミの心は悩み始めます。今やナオミにとって唯一の頼りとなるこの二人の若い嫁たちは、しかしイスラエルでは決して結婚できない、とナオミには分かっていたのです。自分と一緒に来ることで、彼女たちの将来は閉ざされる。考え抜いてナオミは二人を実家に帰す決断をします。それはナオミにとっては自分を後回しにする決断であったことでしょう。モアブの野から100キロもの道のりを年老いたナオミは一人でどうやって帰ることができるでしょう。誰がこね鉢やら家財道具を背負うのですか。しかし、ナオミは二人の嫁の幸せを優先させて彼女たちに自分の母の家に帰りなさい、と言います。

「あなたたちが、亡くなった者たちと私にしてくれたように、主があなたたちに恵みを施してくださいますように。また、主が、あなたたちがそれぞれ、新しい夫の家で安らかに暮らせるようにしてくださいますように。」ナオミの言葉には二人への愛がにじみ出ています。そして「主が」と2回も主の名を出して彼女たちを神様にゆだね、主の祝福を求めています。そして二人に口づけすると二人は声をあげて泣きました。二人は「私たちはあなたの民のところへ一緒に戻ります」といいますが、ナオミは二人を説得します。「私は年をとって、もう夫は持てません。たとえ私が自分に望みがあると思ひ、今晚にでも夫を持って、息子たちを産んだとしても、だからといって、あなたたちは夫が大きくなるまで待つというのですか。だからといって、夫を持たないままでいるというのですか。娘たちよ。それはいけません。それは、あなたたちよりも、私にとってとても辛いことです。主の御手が私に下ったのですから。」ナオミがどんなに娘たちのことを真摯に思っているか伝わって来る言葉です。その言葉を聞き、弟嫁オルパは姑に別れの口づけをし、自分の故郷へ帰っていきました。しかし、兄嫁のルツは彼女にすがりついて言います。「お母さまを捨てて、別れて帰るように、仕向けないでください。お母様が行かれるところに私も行き、住まれるところに私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。あなたが死なれるところで私も死に、そこに葬られます。もし、死によってでも、私があるあなたから離れるようなことがあったら、主が幾重にも私を罰してくださるように。」

有名なルツの言葉ですが、今この言葉を読み上げながら、改めてこの告白のすごさを感じています。ナオミを慕い、愛していることはよくわかります。しかし、ルツのこの言葉には、もっと深いルツの魂の告白が感じられます。固い決心が感じられます。ナオミ、という姑にひきつけられている、というルツは本気でナオミから離れることを一番恐れています。ナオミと人生を共にすることを何よりも願っているのです。ルツはたとい家庭を持

ち、安定した生活が望める、と分かっている、でも、モアブにも、その神々のところにも帰りたくはなかったのです。ルツはナオミを通して、イスラエルの神にひきつけられている。ナオミの神はナオミに苦しみを、苦しみしかお与えにならない神ではありませんか。どうしてルツはそんなナオミの神様にひきつけられたのでしょうか？

子供は大変なことが起こると、お母さんをじっと見つめます。お母さんがどんな風にその苦しみを通るのかを見つめます。その苦しみの中倒れてしまうのか、何にすがりつくのか、お母さんの心をはっきりとその時子供は見ることになります。

ルツはナオミと共に男たちの死を悼みます。そしてルツはナオミの苦しみは自分の苦しみをはるかに超える苦しみであることを知っていました。夫を失い未亡人になったナオミは今二人の息子を立続けに失ったのです。しかし、そこでルツはナオミの中に今まで自分が知らなかった姿を見ます。姑ナオミの特別なところは、これらの苦しみ一つ一つを彼女の神、主の御手から受け取っていることです。それらを偶然の不幸、あるいは自分たちの過失の結果や罪の罰、あるいはサタンの仕業、という風に受け取らず、全能の神の主権を認め、自分の身に起こるすべては主から来たもの、として受け止めている点です。そして、それらの不幸はナオミを完全に打ち倒しはしませんでした。ナオミはまた、この全能者への信頼を捨て去りもしませんでした。ナオミはモアブの嫁たちのためにこう祈ります。「主があなたたちに恵みを施してくださいように。」ナオミは尚も、ヤハウェ、主が誠実で慈しみ深い神であることを信じており、たとえモアブの地に帰ったとしても、主の恵は彼女たちに及ぶことを信じて祈ったのです。その深い苦しみ、悲しみの中、ナオミは尚も、この神様の主権と愛のもとにとどまり続けているのです。そんなナオミにルツは惹きつけられます。ルツにとって、ナオミはワンダー、不思議となり、感動となったのです。ルツの言葉の最後に、彼女はヤハウェの名を用いています。ナオミを通してルツはイスラエルの神への信仰が与えられたのです。1章15節には、悲しいことに弟嫁オルパは自分の民とその神々のところに帰っていった、と書かれています。ルツはナオミを離れては、このイスラエルの神を知ることができないと知っていました。ナオミはルツの聖書となりました。絶対離れたくない、人生で何があっても失いたくない宝をルツはこの苦しみの中、ナオミのうちに見出したのではないかと思います。そのルツの決心を見て、ナオミはそれ以上は言わず、二人は旅を続けます。

二人がベツレヘムに着くと、町中が二人のことで騒ぎ出しました。女たちは「まあ、ナオミではありませんか」と言ったと書かれています。ナオミはベツレヘムの女たちの間で知られていた人物だったのでしょう。あるいは10年ぶりに帰ってきたナオミの容姿がすっかり変りはて、ナオミだと容易には分からなかったのかもしれませんが。ナオミの家族に起こった悲劇、そして何もかも失った彼女がなんとモアブの嫁を連れ、未亡人二人で帰ってきたその姿はセンセーショナルなものだったに違いありません。そして今も昔も変わらず、そのような噂話の中心は婦人たちです！ナオミは言います。「私をナオミと呼ばないで、マラと呼んでください。全能者が私を大きな苦しみにあわせたのですから。私は出ていくときには満ち足りていましたが、主は私を素手で帰されました。どうして私をナオミと呼ぶのですか。主が私を卑しくし、全能者が私を辛い目にあわせられたというのに。」

このナオミの言葉に、私たちはナオミの気持ちを汲み取ることができます。ナオミ、とは「快い」の語源「ナアム」からの派生語で「快い、喜ばしい」という意味の名前です。マラは「苦しむ」の語根「マラル」の派生語です。ナオミは自分の名前をナオミと呼ばず、マラと呼んでください、と言っています。自分の人生が決して快いものではなく、苦いものである言っています。そして再びその苦しみは全能者なる主から来たことを告白しています。これは主への苦々しい恨みの言葉でしょうか？

ナオミは、神がすべてを治めておられるので、苦々しい経験も主によるものに違いない、と確信しているのです。主の御手からこの苦しみを受けとったのです。そこから逃げようとも、ごまかそうともせず、その苦しみに留まる、ナオミの喪に服する姿です。神の全能の御力の前では、まったくどうすることもできないのです。

彼女は素手で帰らされた、といいました。しかしナオミは素手で帰ったのではありませんでした。モアブの女、ルツと一緒にでした。二人がベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れが始まったころでした。

それでは、メッセージはここまでにして、しばらくしおりの質問をもとに自分時間を持ちたいと思います。

ルツ記 1

私をナオミと呼ばないで、マラと呼んでください。全能者が私を大きな苦しみにあわせたのですから。  
ルツ1:20

- ① 私の名は…？私はどのような名前がぴったりの人生を歩んでいるだろうか？
- ② 私の今までの歩みで願いが叶わなかったこと、あきらめたこと、夢を葬らねばならなかったことは何だろうか？
- ③ 主が私の人生に与えておられるもの（人）は何だろうか？私はそれらを主の御手から受け取っているだろうか？その人をありのまま受け入れているだろうか？
- ④ 私はたとえ自分にとって不利になるとしても、他の人に自由を与え生かすことを考えているだろうか？